さい帯血バンクNOW

2010年3月15日発行
日本さい帯血バンクネットワーク
発行者：中林正雄（会長）
〒105-0012　東京都港区芝大門1-1-3　日本赤十字社東館６階
TEL 03-5777-2429 FAX 03-5777-2417　http://www.j-cord.gr.jp/

第52号

新型インフルエンザの流行で緊急出庫
骨髄ドナーの採取中止でさい帯血移植

通常は提供まで１カ月程度

さい帯血の最大の長所は緊急事態にも対応できる「迅速性」です。通常のさい帯血バンクを介したさい帯血移植には申し込みの後、適応判定に数日間、患者検体の送付に数日間、解凍試験に約２週間、提供に関する事務手続きに約１週間と、提供までに約１カ月ほどかかりますが、緊急事態の場合には患者救命のため最優先して出庫することがあります。

新型インフルエンザの流行

昨年夏ごろから新型インフルエンザをはじめ、インフルエンザが猛威を振るってきました。それが思わぬところに影響が出ています。移植用さい帯血を緊急出庫する状況の多くは骨髄移植のドナーが都合により採取中止となった場合です。骨髄移植推進財団によると、過去５年で年間２～７例の報告がされています。昨年は、インフルエンザが流行し始めてからドナー予定者がインフルエンザにかかり採取中止となり、さい帯血を申し込みの翌日に出庫した例が２例あることがわかりました。そのいずれも骨髄ドナーがインフルエンザに感染していることが移植前日にわかり、移植施設から提供可能かという問い合わせがさい帯血バンクにありました。

申請の当日・翌日に移植

そのひとつは昨年11月に起こりました。その日の午後に移植施設から問い合わせがありましたが、出庫担当者が、夕刻からと翌日にも出張の予定が入っている厳しい日程の中、翌日の午後には主治医に手渡して夕刻に移植が実施されたということです。

もう１件は昨年12月で、お昼前のこと。そのときは複数いる出庫責任者がいずれも不在でしたが、翌日の正午過ぎに移植施設の責任医師に手渡し、その夕刻には移植されたということです。

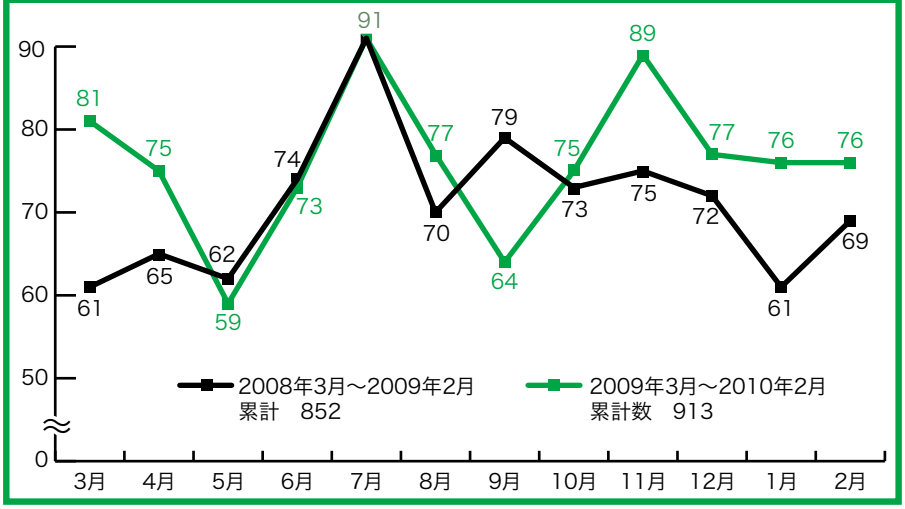
さい帯血バンクと骨髄バンク

日本さい帯血バンクが設立されてから10年がたちました。さい帯血バンクは骨髄バンクとともに、それぞれの長所を生かし、造血幹細胞移植の両輪として機能するようになりましたが、今回の骨髄ドナーのインフルエンザ感染による緊急のさい帯血移植はその一端を表している顕著な例ではないでしょうか。

（資料提供京阪さい帯血バンク）

非血縁間さい帯血移植状況（2009年2月28日現在の速報値）

移植数（累計）6103　公開数 32694



さい帯血移植6000例突破

日本さい帯血ネットワーク事務局の集計によると2010年１月22日、日本国内のさい帯血バンクからのさい帯血移植が6000例を突破しました。

この日の移植は全国で８例実施され、さい帯血は北海道、宮城、東京都赤十字血液センター、京阪、兵庫の５施設のバンクから出庫されたものです。

以前、2008年12月、5000例の際には骨髄バンクの移植も１万例ということで、さい帯血バンクと骨髄バンクによる合同記者会見がありましたが、今回はそれから１年１カ月で6000例を超えたことになりました。

ネットワーク発足後、急激にさい帯血移植の件数が増加した時期もありました。現在ネットワーク設立10周年を経過し、最近は年間移植数が800件台でしたが、まだわずかながら増加傾向にあります。このまま増加傾向が続くものと思われますが、現在の骨髄バンクの移植数の年間1000例となる日も近いのではないでしょうか。患者さんがドナー不在で悩むことなく確実に移植が受けられるようになってきたとも言える時が来たようです。

第32回日本造血細胞移植学会開催

第32回日本造血細胞移植学会総会が2月19～20日に静岡県浜松市で開催されました。小島勢二会長（名古屋大学大学院医学系研究科小児科学）が掲げた今年のテーマは「移植医療の選択：Evidence vs Prospect」と題され、移植医療を支える医師、看護師、薬剤師、栄養士、検査技師等の医療従事者の他、患者さんや患者支援団体なども参加し、各分野における多くのワークショップやポスター掲示などが行われました。

さい帯血移植に関するテーマでは、京阪さい帯血バンク単独のデータを用いた報告や、骨髄・末梢血との比較、局所に有効な経口ステロイド剤を用いたGVHD対策、抗HLA抗体陽性例への幹細胞ソースの選択等、あらゆる角度からの解析が報告され、会場では活発に質疑応答が飛び交い、熱のこもった論議が交わされる場面も数多くありました。

骨髄バンク・さい帯血バンク合同報告会では、骨髄バンクからはPBSCTに関する報告が、さい帯血バンクからは移植データ一元化の進捗状況の説明があり'10年４月に開始予定との報告がなされました。

また、大ホール前のロビーに設けたさい帯血バンクのブースでは、さい帯血の採取から移植に至るまでの流れを、実際に使う器具で示したパネルを展示し、多くの方が足を運んでくださいました。

すこやかに、幸せに。
明日への夢、描きたい。

NIPRO

人から人へ、心から心へ、医療という名のヒューマンなコミュニケーションを広げたいー。真の健康を守り、幸福な社会を築くために、優れた医療器具を広くおとどけしているニプロ。

私たちニプロはさい帯血を採取保存する技術でさい帯血バンクを応援致します。

NIPRO
ニプロ株式会社
大阪市北区本庄西3丁目9番3号

連載　私とさい帯血移植「医師として患者として」

最終回◎ 患者になった医師だからできること

田結庄　彩知

忘れたいことも見つめ直して

この連載を初めてから2年が経ち、今回が最終回となった。この話を頂いたのは２度目の移植を受けてから９カ月が過ぎたころで、この先どうなるのか、最終回まで生きていられるのかと、とても不安で「もしものことがあったら、打ち切りでいいですか？」と編集担当者に聞いた記憶がある。

医師として患者として、病気と正面から向き合い、闘いの日々を振り返ることは、思い出すだけでも吐気がするような出来事や、心の奥底に秘めておきたいと思う感情に出会うこともあり、逃げ出したくなることもあった。今、改めて読み返してみると、冷静になって自分を見つめ直し、まわりを見わたすことで、今の命があることがどんなに素晴らしいか、自分がどれほど多くの方々に支えられて生きているのかを知る、いい機会だったと思う。

現在は、体も心もずいぶんと回復し、周囲の人と変わらないくらい元気に毎日を暮らしている。好きなものを食べて美味しいと感じることができたり、花や草木を見て美しいと思うことができたり、穏やかで普通の生活を送ることはなんて幸せなことだろうと思う。病気が分かってからいつも脅え続けた死や再発の恐怖とも、ようやく少し距離を置けるようになったのか、10年後の自分、20年後の自分、もっともっとその先にある将来を、想い描けるようにもなった。

私に生きるチャンスをくれたお母さんと赤ちゃんに、懸命に治療してくれた主治医をはじめ多くの医療スタッフの方々に、そしていつもそばで見守ってくれている大切な家族に、心から感謝する日々だ。

この体験を移植患者さんへ

救っていただいた大切な命で生きるこれからの人生を、どう歩んでいこうか。今まで支えてくれた数多くの方々に、何か恩返しができればいいのに。自分に何ができるのかを探しているうちに、もしかしたら６年にわたる闘病生活で得た経験が、今も病気と闘っている患者さんの助けになるのかもしれないと思うようになった。

できることならもう一度、医師として患者さんに向き合いたい。これからの人生は、１人でも多くの患者さんに生きる喜びを知ってもらうため、医師として患者として、移植医療に携わっていきたいと考えている。

患者さんを支えるチーム

1970年代から始まった移植医療は、骨髄バンク、さい帯血バンクの設立と、新たな移植の方法や薬の開発などにより大きく進歩し、最前線で昼夜を問わず患者さんと向き合う医療スタッフの努力があって、現在では多くの命が救われるようになった。幸運にもその中の一人である私が今思うことは、病気と闘うために、移植という治療を乗り越えるために、多くの支えも必要だということだ。

移植を受ける患者さんには、身体や心の問題や、日常生活を送る上での様々な工夫にいたるまで、医師や看護師、薬剤師や栄養士、理学療法士など様々な専門分野から構成された医療チームがサポートする体制が求められているのかもしれない。

移植の前に患者さんが抱える恐怖や不安が和らぎ、移植で命が救われても悩み苦しむ患者さんが減って、移植で健康を取り戻した患者さんが、安心して長い人生を送れるような移植医療を目指してみたい。

医師として再び……

今年の春、医師として病院に復帰するチャンスを頂いた。長いブランクがあり、不安も大きいが、勇気をもって新しい一歩を踏み出そうと思う。誰かの役に立ちたいと医師を志した気持ちを忘れることなく、先輩や目の前の患者さんから多くを学びながら、自分にできることを探していきたいと思っている。

生きていることは幸せだと思う。いのちがあることは幸せだと思う。どうか、私にいのちをくれたお母さんと赤ちゃんも、どこかで幸せに暮らせていますように。私に生きる勇気をくれた多くの方々が、これからもずっと幸せでありますように。今も病気と闘っている患者さんに、明るい未来がやってきますように。

筆者プロフィール
たいのしょうさち◎1977年神戸市生まれ。2002年、香川大学医学部卒業後、国家公務員共済組合虎の門病院内科にて研修。2004年、重症再生不良性貧血と診断。ATG療法施行も効果なく８月にさい帯血ミニ移植を受ける。2005年、虎の門病院を退職し東京医科大学大学院に進学。2007年６月、晩期生着不全で再入院。７月、２度目のさい帯血ミニ移植を受け、８月に退院し今に至る。

移植病院訪問

⑥兵庫医科大学病院

移植に特化した医療機関

兵庫医科大学病院では、30年前に最初の骨髄移植を実施した造血幹細胞移植では歴史のある病院です。血液内科では昨年は年間で86件の移植を行っており、そのうち11例がさい帯血移植で、昨年末までには106件のさい帯血移植が行われました。このほかに小児科でもさい帯血移植が行われ、小児科では過去10年間に11件、昨年は１件のさい帯血移植が実施されました。

入院患者の9割は移植

血液内科の小川啓恭教授は「うちの入院患者さんの約９割は移植の患者さんです。化学療法で治癒が見込める患者さんは、近隣の関連病院で治療にあたってもらっています」と語るように、兵庫医大の血液内科は造血幹細胞移植に特化した医療施設ということができそうです。しかも、その移植方法も新規治療法を臨床試験として行う部分が大きく占め、移植成績向上のため、意欲的な取り組みが大きな特徴となっています。

生着不全を克服するために

さい帯血移植には多くの長所がありますが、短所としては一定の低くない

骨髄内さい帯血移植は腸骨に穿刺針で輸注

頻度で生着不全が発生するという問題があります。その原因としてはさい帯血が骨髄や末梢血に比べ採取できる移植細胞数が少ないことが考えられます。通常のさい帯血移植は静脈にさい帯血を輸注して移植し、移植された細胞は骨髄に入って造血を開始するのですが、静脈から心臓を経由して肺に入って肺に留まってしまう細胞があることが知られています。この現象を防ぐために、静脈ではなく、骨髄内に直接さい帯血を輸注しようというのが骨髄内さい帯血移植です。

骨髄内移植で生着率の向上

兵庫医大では日本さい帯血バンクネットワークの承認のもと2008年８月から骨髄内さい帯血移植を臨床試験として開始しています。移植医の岡田昌也さんは「イタリアの施設では良好な結果が報告されていますが、私たちもこれまでに７例の骨髄内さい帯血移植を行いました。この移植法での生着率の向上を期待しています」と述べています。また、さい帯血の少ない細胞数を補い、生着率向上のため、２つのさい帯血を同時に移植する複数さい帯血移植にも積極的に取り組んでいます。複数さい帯血移植は、兵庫医大を含む複数の施設で臨床第２相試験が行われ、現在は結果の解析中です。

果敢な移植への挑戦

昨年行われた11例のさい帯血移植のうち、複数さい帯血移植が３例、骨髄内移植が４例で果敢に新たな可能性を求めて兵庫医大では取り組んでいます。このほか、兵庫医大での大部分の移植は、血縁者間でハプロタイプのミスマッチ移植、親子間のHLA半合致移植を実施し、特に進行期の患者さんでその威力を発揮するなど、意欲的な骨髄や末梢血の移植が数多く行われています。これら新しい試みにより、さい帯血移植がより安全に行われるようになり多くの患者さんが救われることを目標に努力しています。

■善意のお気持ちに感謝します■

静岡県	豊田 龍二様	10,000円
東京都	堀北 恵理様	10,000円
埼玉県	大寺 信行様	6,000円
岩手県	遠藤 律枝様	4,000円

●設立10周年記念事業寄付

愛知県	松本 喜久也様	10,000円

設立10周年記念事業への寄付金の受付けは終了させていただきます。多くの方から同記念事業のために寄付金をいただき、誠にありがとうございました。お陰さまで無事事業を終えることができました。

〈寄付受け付け専用口座〉

●郵便局からの振り込み

００１８０－９－５７３９０

●他の金融機関からの振り込み

金融機関名：ゆうちょ銀行

金融機関コード：９９００

支店番号：０１９

預金種目：当座

口座番号：００５７３９０

口座名義：日本さい帯血バンクネットワーク